

本誌が第五十巻に入るに當つて

本誌はこの號を以て第五十巻に入る。創刊後五十年を迎えたのである。

月刊雜誌の發行としては一應長いことといえよう。世界にこの長さの續いている月刊雜誌が幾つあるか知らない。廣い世界、殊に現代文化の相當長い國々では、必ずしも稀ではないかもしれない。我國において、第五十巻の月刊が幾つ現存しているか數えてみたことはないが、明治元年から今年で八十五年の間で、五十年つゞけられているものは我國として長いことといつてよからう。

本會がフレーベル會の名において創立されたのは明治二十九年であり、四年の後明治三十四年一月、月刊『婦人と子ども』を創刊した。本誌の前名であり、これを以て本誌の第一巻とする。先づ當時の保育界の先覺諸氏の熱意に深き尊敬を捧げ、その後本誌を育成して來られた多くの協力者諸氏に感謝を表せざるを得ない。

大正七年、會名を日本幼稚園協會に、誌名を『幼兒の教育』と改め現在に至つてゐる。誌名の改正は、婦人と子ども

もという、稍一般的名稱から、幼兒教育の専門雜誌的名稱に進んだものといつてよからう。『婦人と子ども』時代から、幼兒教育中心の趣旨に變りはなかつたが、それを表面にかゝげたものといえる。而して、兒童教育、小學校教育についての教育雜誌は既に多くあり、また、教育雜誌といへば、小學校教育のものと考えられるなかに於いて、就學前の教育に関する教育雜誌の存在を標榜せんとしたものである。

爾來、その志に對して、その實の甚だ伴わないことを遺憾とし、編集發行の任にあたるもの微力を恥ぢざるを得ないが、各方面の好意と協力については深謝にたえない。殊に、本誌の古き愛讀者各位の終始變らざる友誼に對しては常に感銘してゐるところである。敢て友誼というのは、その人々の本誌に對する期待が、たゞに讀者としてだけでなく日本の就學前教育のための本誌の存在と使命の助長育成にあることを信じて、その親愛と共に激勵を強く感ずるからである。本誌は常にそれに背かざらんことを期してゐる

がなお一層の友誼を懇願してやまない。

今や、就學前の問題は、その重要さに對する覺醒と共に問題の領域は廣さと深さを日々に加え來つてゐるといつていふ。先づ深さにおいて、幼児教育の基礎知識として必要な、諸學の進歩は著しい。その教育の實際についても、益々精深な考究を要する。殊に、新教育の大目的に向つてその基本としての幼児期の重要性は、革新的であるといつていふ。その意味において、兒童發達の原理を研究する總ての學問は、本誌の重要な知識であり、新教育の識見と方法とは、本誌の不斷の指導精神である。これを本誌の内容とすることに怠慢であつてはならない。次に廣さにおいて今日の教育觀の擴大と共に、所謂就學前の教育問題は、非常に廣範になつてゐる。或は、就學前幼兒生活のあらゆる面に、その教育的性質と機能とが周到になつてきてゐるといふべきでもあらう。かくて、幼稚園の問題が、その研究において深められると共に、曰く保育學校、曰く保育所、曰く託兒事業、曰く兒童遊園、曰く幼兒文化、曰く幼兒保護これを綜合していえば、幼兒の家庭生活、幼兒の社會生活の一部に亘る教育的考慮は、現實の細密と深刻と、而して之に對する理想の向上とを、日増しに進めてゐるのである。そのすべてを本誌の關心とすることに偏してはならない。

又、これらの幼兒問題の各領域に對して、それだけの分化的研究や推進の努力が拂われているのが、今日の發展で

あり、まことに盛觀であり、慶賀すべきである。幼稚園にしても、公立、私立、それらの團體が結成せられ、保育所の團體があり、宗教的團體があり、地域的團體があり、かくして各分化活動による發達が促進せられてゐるのであるが、本誌はそのいずれにも偏せざるものである。そのすべてが『幼兒の教育』の内容事項である以上、幼兒の教育という廣き立場において、すべてが關心事であり、或は、各分化の關係の上に、本誌の小さいながら大切な職分を感じてゐるのでもある。すなわち、本誌は、就學前教育の専門雜誌ではあるが、その範圍内において、一學、一流、一系統に備るものでない。どの角度からでも就學前幼兒の教育的向上に役立つものは、委く本誌の尊重する處である。

第五十巻に入るに當つて、本誌の心にあるものは、回顧よりも展望である。刊行の長さよりも、本會の一活動としての本誌の貴重な使命である。自らの從來の到らなかつたことよりも、それにもかゝらざる多くの誌友への感謝である。更に、發行一時期を迎える日への希望と、努力を怠つてはならないという自戒である。

本誌の多數の友人諸賢の御健康を祈りつゝ、昭和二十六年の新年の辭とする。

昭和二十六年一月

日本幼稚園協會